

『ヴィレット』における女性の歩行とコスモポリタン都市 「想像力」が掘り起こす歴史の記憶

山本菜々美

Charlotte Brontë の小説 *Villette* (1853)では、ベルギーをモデルとする架空のラバスクール王国にあるコスモポリタン都市ヴィレットを舞台に、近代的な中心街(Haute-Ville)と荒廃した旧市街(Basse-Ville)という対照的な都市空間が描かれている。主人公で語り手の Lucy Snowe は寄宿学校の教師として働きながら、このふたつの空間を往来して都市の多層性を経験する。小説の終盤には、その経験が次のような場面につながる。小説第38章において、Lucy は寄宿学校の女校長 Madame Beck に阿片を投与されて意識が揺らぐなかで、擬人化された「想像力(Imagination)」によって現実を逸脱した「奇妙なヴィジョン(a strange vision)」(450)を見る。その「想像力」に導かれ、夜の公園に向かう前に彼女は、かつて何気なく見過ごしていた公園の柵に、男性や Madame Beck のように体格のよい女性には通れないであろう「すきま(gap)」(450)があったことを思い出し、自分なら通れるかもしれないと考える。

これまで第38章をめぐるのは、「ゴシックの新たな段階(the new phase of Gothic)」として女性の内面の苦悩を表現する技法であると論じられ(Heilman 158)、「家庭内の領域に安住する私的な関係性(a private relationship ensconced in domestic space)」に回収されない、都市と結びついた女性の生の可能性を示していると評価されてきた(Brown 380)。ヴィクトリア朝における都市表象を研究する Tanya Agathocleous は、男性作家が都市の細部を断片的に描く「スケッチ的」ヴィジョンを積み重ねることで、都市の全体像となる「パノラマ的」な統一を可能にしたと論じている(72)。こうした議論を踏まえつつ、本発表では、Lucy の多層的な都市の観察に着目し、第38章で描かれる「すきま」の描写が女性の抑圧された犠牲の記憶に光を当てる象徴的な役割をもつことを明らかにした。

第1節：Lucyによる中心街のスケッチ——コスモポリタン都市に抱いた幻想

第9章において、ヴィレットに移住したばかりの Lucy は、都市の中心に位置する寄宿学校のヨーロッパのあらゆる国々から来た様々な階級の女子学生たちを観察しながら、「ヴィレットはコスモポリタンな街だ(Villette is a cosmopolitan city)」(82)と述べる。そのなかでも彼女は Madame Beck を「非常に偉大で有能な女性」(74)と評価し、学校という限定された空間にとどまる存在ではなく、国家をも導きうるほどの統率力を備えた女性だと捉えている。このときの Lucy には、中心街は公的領域で女性が主体性を確立できる場所のように見える。

また、Lucy は都市の文化的側面にも幻想をいだく。その幻想は、イギリス出身の医師 Dr. John との都市経験によって膨らんでいく。Lucy にとって彼は、ヴィレットについて「完璧な知識」(198)を持ち、あらゆる展示室や美術館の扉を開けてまわる自由な存在として映っている。Lucy は Dr. John と都市をめぐる際に、彼がさまざまな空間に自分を導いてくれる姿を、『千夜一夜物語』の「ひらけ！ごま(Open! Sesame)」(198)という魔法を唱える人物になぞらえる。中心街では、男性がハイカルチャーの知識やネットワークを所有する様子も垣間見られる。

こうした経験を通じて、Lucy は自己の成長を強く意識するようになり、自らを「これから成長していく人物(I am a rising character)」(309)と宣言する。彼女が中心街でいづくコスモポリタン都市ヴィレットのイメージとは、異なる性別や階層をもつ人々がそれぞれに自己を形成しうる場である。

第2節：Lucyの幻想の崩壊——コスモポリタン都市に残存する歴史

第34章において、Madame Beck は Lucy と彼女の同僚 Paul Emanuel の関係が深まりつつあることを察知し、二人の接近を阻むために彼女を旧市街へと向かわせる。Lucy がそこで最初に目にするのは、きらびやかな中心街とは対照的な荒涼とした光景である。彼女は、かつて富裕な男性たちに所有されていたと思われる土地が今やその繁栄を失っている様子を見て、歴史的な街の移り変わりを意識する(387)。

さらに旧市街には、男性的な社会や経済の構造を利用する女性と、反対にその犠牲となる女性の姿がある。Lucy はここで、Paul が父親の破産によって社会的地位を失い、恋人の Justine Marie と結婚できなくなった過去の事実を知る。Justine Marie の祖母 Madame Walraven は「激しい怒り(the violence of a temper)」(392)をあらわにし、Paul との結婚を許さなかった。その妨害の理由は Walraven の家系が築いてきた財産や権力を維持するためであった。一方、Justine Marie は自分の意志をつらぬくことができず、修道院に身を引き死に至る。彼女の犠牲の記憶は、旧市街では肖像画として記録され、神に殉じた従順な人物として語られている。さらに Walraven が植民地グアドループに所有する土地は、男性中心の植民地主義のネットワークの中で男性の代理人を通じてのみ再生可能

な資産として描かれる。Walraven は、Paul を「優秀な代理人」として利用しようとしている(461)。このように旧市街の歴史は、貪欲な Walraven が富と権力を手に入れるために男性的な社会構造を利用し、Justine Marie がその犠牲となったことを示している。

Lucy の経験をつうじて描写された都市のスケッチは、中心街が提示する女性の自律の可能性と、旧市街が示す依然として女性を縛る男性的な社会構造という、コスモポリタン都市に生きる女性がいただく期待とその幻滅の二重性を浮かび上がらせている。

第3節：「想像力」が導く新たなヴィジョン——歴史化された女性の記憶をめぐって

Lucy は中心街と旧市街の都市の観察を経て、第 38 章において阿片がもたらした「想像」のなかで公園の柵にある小さな「すきま」を思い出す。この「すきま」の想起は、中心街と旧市街というふたつの都市空間で公的歴史と私的記憶が交差する重要な場面へと彼女を導くことになる。Lucy は自分ならばその「すきま」を「通れるかもしれない」という気持ちに押され、寄宿学校を出て中心街にある夜の公園にたどり着き、権威の象徴であるオペリスクなどのエジプト的建造物が並んでいる様子を目にする。そして旧市街で過去に勃発した自由を求める市街戦の犠牲者の墓を思い浮かべる。こうした権力と犠牲の歴史の並置は、後に Walter Benjamin が『歴史の概念について』の第 7 テーゼにおいて指摘するような、華やかさの背後に暴力と犠牲の記憶を内包する都市の二重構造を露わにしているだろう。

さらに Lucy の「想像力」は、この空間に女性の私的な歴史を交差させる。彼女は公園の奥へと進み、そこにいた Madame Beck、Walraven 家の人々、そして Paul の様子を物陰から窺う。するとそこに現れたのが、旧市街で耳にしていた Paul の元恋人と同じ名前を持つ若い女性 Justine Marie である。Lucy は彼女について、寄宿学校を出たばかりの「都市ヴィレットの少女」(464)であると同時に Walraven 家の親戚である、と読者に説明する。ここで Lucy が Justine Marie について、Paul の不在中に「彼の残した財産(treasure)」(466)として他の男性たちによって守られるだろうと感じている点は重要である。この表現は、Justine Marie が Walraven や Beck を含めた男性のネットワークのなかで管理されるべき存在のように扱われていることを示すからである。さらには、Paul のかつての恋人への「聖なる献身」は忘れられ、「現在」が「過去」に打ち勝ってしまった(467)という。こうした Lucy の語り、過去の女性の犠牲の歴史が現在の権力と財産のために利用され、忘れ去られていく様子を浮かび上がらせる。

Lucy は当初、ヴィレットを誰もが平等に自立できるコスモポリタン都市であると捉えていた。しかし中心街と旧市街を行き来し、多様な人々の過去や歴史に触れるなかで、その見方は揺らいでいく。彼女が「すきま」の想起をきっかけにしてたどり着いた夜の公園では、男性的な権力および犠牲をめぐる公的な歴史と、女性の私的な歴史が交差している。このように「想像力」による導きをきっかけとした公園の場面は、統一的な都市像をめざす「パノラマ」的描写では埋もれてしまう女性の私的な歴史を示している。Lucy が都市の多層性に会い、自身の都市のイメージを再考するという経験を経たからこそ、男性的権力のもとで埋もれた女性の犠牲の記憶に光を当てることができたのである。

引用文献

Agathocleous, Tanya. *Urban Realism and the Cosmopolitan Imagination in the Nineteenth Century Visible City, Invisible World*. Cambridge UP, 2011.

Benjamin, Walter. "On the Concept of History." *Selected Writings: 1938–40*, Vol. 4, ed. by Marcus, Bullock and Michael W. Jennings, trans. by Edmund Jephcott and Howard Eiland, Belknap Press of Harvard UP, 2006, pp. 389–400.

Brontë, Charlotte. *Villette*, 1853, Oxford UP, 2000.

Brown, Kate E. "Catastrophe and the City: Charlotte Brontë as Urban Novelist," *Nineteenth-Century Literature*, vol. 57, no. 3, 2002, pp. 350–80.

Heilman, Robert. "Charlotte Brontë's 'New Gothic,'" *The Brontë Sisters Critical Assessments*, ed. by McNees, Elenor. Helm Information, 1996, pp. 149–61.